

## 『幼児期の言語生活の実態』(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ)

野地潤家先生の「幼児期の言語生活の実態」全四巻が完結した。すでに本誌二十号で紹介させていたように、昭和四八年四月一日、まず第Ⅰ巻が刊行された。この第Ⅰ巻は、刊行と同時に各方面から注目を集め、先生は、国語教育界のすぐれた研究出版物に対して贈られる第四回博報賞ならびに第一回石井賞を受賞された。その後、昭和四九年一〇月一日に第Ⅱ巻、昭和五一年一月一〇日に第Ⅳ巻、昭和五二年一月一日に第Ⅰ巻が、実に五年に近い歳月をかけて世に送り出された。本書は、ご長男の誕生から満六歳期までのことばの生活・成長のありのままの姿を、周囲との対話本位にとらえた、通巻三七八九ページにもよる膨大なことばの実態の記録である。このたびの全巻完結にあたって、野地先生ご自身、第Ⅰ巻のあとがきで、つぎのように述べられている。

「思えば、長男澄晴の幼児期の言語生活の実態の把握を思い立ち、みずからの言語教育研究の基礎作業にしようとしてから、すでに満二九年六カ月を経てしまった。ここにま

ず、長男澄晴の『幼児期の言語生活の実態』全四巻を刊行することができたのは、なにものかえがたいよるこびである。」

全巻完結に至るまでの先生ならびに絶えずご協力をおしまれなかつた奥様の長年にわたるご苦心を思う時、そのよろこびは配察するにあまりあるものがある。それはまた、かくもつぶさな、世界にも例を見ないことばの実態の記録を手にするのできたわたくしども言語教育にたずさわる者の、大きなよるこびでもある。

全巻を通じての本書の内容・構成はつぎのようになっている。

- 第Ⅰ巻 (全七五七ページ)
- Ⅰ 乳児期の言語生活の実態  
昭和23・3・9 | 昭和24・3・8
- Ⅱ 満一歳期の言語生活の実態  
昭和24・3・9 | 昭和25・3・8
- Ⅲ 満二歳期の言語生活の実態  
昭和25・3・9 | 昭和26・3・8
- Ⅳ 満三歳期の言語生活の実態  
昭和26・3・9 | 昭和27・3・8
- Ⅴ 満四歳期の言語生活の実態  
昭和27・3・9 | 昭和28・3・8
- Ⅵ 満五歳期の言語生活の実態  
昭和28・3・9 | 昭和29・3・8
- Ⅶ 満六歳期の言語生活の実態  
昭和29・3・9 | 昭和30・3・8
- さて、本書は、ご長男誕生の昭和23・3・9(火)「午後九時五十五分、初声がきこえた。……」という記述で始まっている。まだことばの出ない乳児期のはじめにおいては、小さな生命をいつくしみはぐくみ守っていくれようとす日々の子の育児の様子が記録されている。それは読む者の胸をうたないではおかない。「昼間、二時間おきくらいにお乳をのませる。泣くにつれ、母もいっしょに泣きだしてしまふ」(昭和23・3・24)といったなにげない一行も、目下乳児をかかえている私などには、心にくいこんでくるような箇所であった。
- では、ことばがはじめてからの記録はどうであらうか。「ありがとう」ということばが習得されていく過程をたどるとつぎのようである。
- アリガトー1。(母↓)

○ト12。(↓母)

母が1の文のように言って、頭を下げて見せると、2の文のように言って、頭を下げるようにする。(附24・2・26)

○アリガト1。(父↓)

○ト2 (↓父)

父が頭を下げながら、1の文のように言ってみせると、2の文のように頭を下げながら言う。2の文の「ト」は、「ト」にちかいが、だいたい「ト」。「ト」になっている。(附24・2・27)

○アリ……ト。(↓母)

「アリガト1」と言うのを、このようにまで言えるようになった。しかし、「リ」は、いちじるしく弱く、かすかにそれとなく聞きとれる程度である。(以下略) (附24・4・6)

こうして抜き出してみると、親の動作やとばを模倣しながらことばを覚えていく様子が、手にとるように分かってくる。また、かすかにそれとなく発せられた「リ」がしっかりと聞きとられておるに、子どものことばをつねに敏感に受けとめてそれを伸ばしていくこうとする親としての理想的な態度がうかがえる。ここに引用したわずかな行数の記述の中にさえ、ことばの発達すじみちや、その発達を保証していく外的諸条件を具体的に把握することができる。このように、本書

は、従来の幼児言語研究では決してとらえることのできなかつた、ことばがことばとして成長していくその瞬間をも、つぶさに、しかも的確にとらえているのである。それは、本書が、すべて対話本位にことばを採録し、つねに場面や状況を明記するという精細かつ客観的な人生Vのことばの実態記述になっているからである。

ところで第1巻には、幼ない澄晴さんの生活ぶりやご成長ぶりを、澄晴さんに向かって語りかけるように書かれた一五三編のもののお話群が収録されている。「Ⅱ幼児期の生いたちの実態」がそれである。そこには、心身ともにすくすくと育っていかれる澄晴さんのさまざまな姿が、愛情あふれる文章で生き生きと描かれている。「澄晴ちゃん//澄晴ちゃんが生まれたときのお話をしましょう。……」

「澄晴ちゃん/こんどは澄晴ちゃんとかんなくず」というお話。……といった書き出しの文章には、それぞれ「お誕生」かんなくず」といった題がつけられている。ご長男への愛と祈りのメッセージが、こんなにも心あたたまる形で送り続けられていたことに、驚嘆するばかりである。このお話群は、ことばの実態記録とあわせ読むと、非常に興味深いものとなる。なにげなく読みすごしていた一行の記述が、このお話群を読むことによって、言語発達上重要な箇所として見直さ

れてくることもあるし、澄晴さんのその時期その時期におけることばの生活の全体像が一挙に目の前にひらけてきたりする。このような形で子どものことばや生活をとらえていくことも、発主主観的要素を含むとは思え、たいせつな作業の一つではないかと思われる。さらに、第IV巻のあとがきには、澄晴さんの小学校・中学校・高校・大学・大学院における文章表現・習作の一部が、八九ページにわたって収められている。ここまで読み進んでくると、本書はまさに、ひとりの人間の成長にかかわる一大叙事詩ではなかつたかという思いにとらわれる。清水文雄先生は、本書を評して、A「幼児期の言語生活の実態」には、ことばの、同時に人間の本質にかかわる問題が随所に輝く露頭を見せている、世の父母・教育者はもとより、ひろく心ある人々の理解の眼を待つかのように。V(第二巻所収)と道破されている。

なお、各巻のあとがきでは、先生ご自身によって、澄晴さんの言語習得過程で注目すべき点が、成長を見守り続けてこられた育児者としての視点から、詳しく分析・解説されている。目下本書は、英語に翻訳されており、その完訳が待たれている。精細な実態記述から出発すべきだという幼児言語研究の今日的動向の中で、国際的にも大きな注目を集めることと思われる。(文化評論出版刊、A5版ⅡⅣ巻とも定価二〇、〇〇〇円Iのみ一八、〇〇〇円)(足立茂美)